

MIC&沖縄マス協・沖縄平和行進 普天間基地包囲行動「人間の鎖」参加

2010年5月14日(金)～16日(日)にMIC&沖縄マスコミ労協の連帯行動として沖縄平和行進・最終3日目の西コース(約14キロ)を行進し、翌日16日の普天間基地包囲行動(人間の鎖)に参加しました。MICからは新聞労連：59名・民放労連：14名・出版労連：12名と事務局を合わせて総勢86名が参加しました。

1日目：5月15日(土)

平和行進参加

行進参加者は前日の14日那覇入りして、翌15日の午前8時に県庁前に集合し、バスに乗って出発地である北谷町役場まで移動しました。MICからの平和行進参加者は70名を超えました。

アジア・太平洋戦争末期の1945年、米軍は3月26日に慶良間諸島へ、4月1日には沖縄本島への上陸作戦を開始しました。6月23日には日本軍による組織的な抵抗は終わり、沖縄は米軍の占領下に置かれることになりました。

沖縄の人々は日本本土と平和憲法への復帰を求め、粘り強く運動を続け、1972年5月15日には沖縄の本土復帰が実現しました。しかし実際には、復帰後も多くの米軍基地が残り、沖縄の人々にとっては復帰前と変わらぬ日々が続くことになったのです。

こうした中で1977年から、沖縄の本土復帰の日である5月15日に、本土復帰後も続く米軍による占領状態に抗議し、基地の撤去を訴えて沖縄全土を歩く平和行進が始まりました。平和行進は今回で33回目を迎えました。



平和行進は3コースに分かれ、MICと沖縄マスコミ労協が参加したのは、最終日の西コースです。北谷町役場(出発式)～キャンプ瑞慶覧(在沖海兵隊基地司令部)石平ゲート前～宜野湾市海浜公園という約14キロの道程です。前日より沖縄は梅雨入りで朝から雨模様でした。

出発に際して「基地のない沖縄を 第33回5.15平和行進」と赤地に白く染め抜かれたハチマキが全員に配られました。今回は普天間問題の盛り上がりも反映して本土からの参加者も多く、日本各地からの参加の労働組合・市民団体の旗もはためいていました。(写真：出発式)



北谷町～石平司令部ゲート前～宜野湾市役所

午前 9 時には北谷町役場を出発しました。北谷町役場を出発して石平司令部ゲート前を目指しました。当初から雨が強く、気温も下がりました。

例年に比べて、本土からの参加者が増えたので、行進団の人数が膨れ上がり、端慶覧の公民館でのトイレ休憩では「給水タンクの水がなくなって、トイレが使用できません。トイレの使用をやめて至急出発します」というアナウンスがありました。

キャンプ瑞慶覧（在沖海兵隊基地司令部）の石平司令部ゲート前に到着すると行進団は、シュプレヒコールをあげて「基地返還」を訴えました。

フェンス越しに米兵住宅の手入れされた芝生が見えました。米兵の家族が、シュプレヒコールをあげる行進団を丘の上からながめていました。「沖縄」と「アメリカ」の距離感を改めて感じました。(写真：行進をながめる米兵家族)



午後 1 時過ぎには宜野湾市役所に入り、そこで昼食となりました。市役所には新聞労連九州地連の仲間 10 名あまりも那覇市内からタクシーに乗って駆けつけてくれて後半の平和行進に合流してくれました。地域の人たちも総出で麦茶のサービスを行っていて、基地反対の運動が地域に根付いていることを垣間見ました。

宜野湾市役所～宜野湾海浜公園

悪天候で 1 時間以上遅れて午後 2 時過ぎに宜野湾市役所を出発しました。再び基地沿いに行進し、普天間基地のゲート前も通過しました。

沖縄県マスコミ労協の若手は、MIC が贈呈した

「県内に基地は要らない！ 普天間基地は早期返還を！」と書かれた横断幕を道行く車に見えるように掲げて行進しました。



(写真：横断幕)

本土のデモ行進などは、必ず警察が参加して車を遮断したり、横断を促したりしますが、沖縄の平和行進は、地元の若者がすべて交通整理を行っていました。それだけ平和行進が地元密着の行事として、根付いていることを実感させられました。

雨がさらに強くなり、土砂降りの中での行進となりました。行進団にも疲労の色が見え始めます。ますます遅れ気味になりました。

(写真：雨中の行進)

幹線道路から大きく右折して、宜野湾市海浜公園に向かいました。歓海門という大きな門をくぐり、県民大会の行われる屋外劇場に向かいました。



県民大会に着いたのは午後 4 時半過ぎ、予定より 1 時間半以上遅れての到着でした。西コースの到着が最後でした。5・15 平和行進を締めくくる「5・15 平和とくらしを守る県民大会」(同実行委員会主催)には、県内 3 コースに分かれた行進団が、会場の宜野湾市海浜公園野外劇場に結集しました。しかし、雨はさらに強くなり、県民大会も進行を一部切り上げて、午後 5 時には終了しました。

沖縄県マスコミ労協との交流会

平和行進終了後いったん全員、ホテルに帰って雨に濡れた服を着替えて、午後 7 時 45 分から沖縄県マスコミ労協との交流会に集いました。交流会の参加者は、沖縄県マスコミ労協からの参加を加えて 100 名を超える人数となりました。沖縄でも最大規模の居酒屋をカウンタースペースまで完全に借り切った交流会となりました。

雨に降られて身体は冷え切っていましたが、宴が始まればそれぞれのテーブルで会話も弾みました。交流会では北海道から九州までの参加者が、それぞれ自己紹介を行い地元との交流を深めました。

2 日目：5 月 16 日 (日)

16 日のバスツアー

平和行進の翌日の 16 日には現地見学のバスツアーを行いました。午後 9 時に県庁前集合、バスツアーには 80 名が参加しました。沖縄県マスコミ労協の具志堅議長（沖縄タイムズ労組）と新聞労連沖縄地連の米倉中執（琉球新報）がガイド役で参加していただきました。また地元の平和ガイドの川満昭広さんにガイドをしていただきました。

嘉数高台

まず最初に宜野湾市にある嘉数高台に向かいました。普天間基地は在日海兵隊のヘリ基地があり、宜野湾市の26%の面積を占め、ちょうど中央に位置するため宜野湾の市街地は文字どおりドーナツ状に広がっています。

2004年8月13日には、沖縄県宜野湾市にある沖縄国際大学の構内にヘリコプターが墜落しました。普天間基地は、いつ大事故が起こってもおかしくはない危険な基地です。沖縄国際大学も嘉数高台から見ることができました。晴天ならば展望台からは普天間基地から北谷～読谷まで見渡せますが、あいにくの雨模様で遠方まで見えませんでした。嘉数高台は、沖縄県の激戦地であり、ただ1つ残されたトーチカを見学しました。銃眼が海に向かって開いて、一部は破壊されており米軍の爆撃の激しさを物語っていました。

辺野古見学

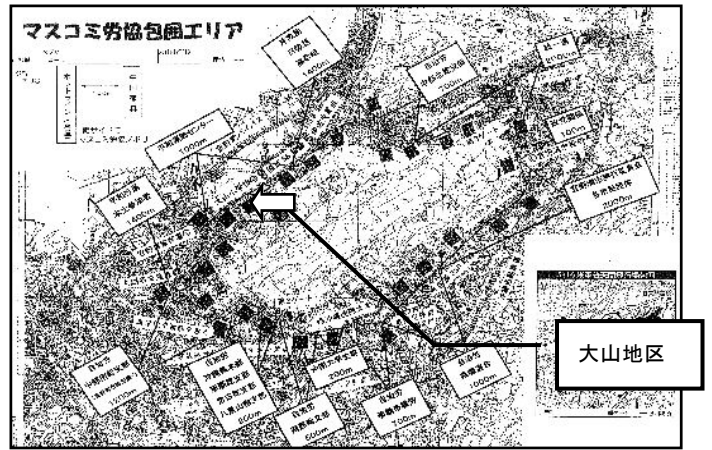
嘉数高台から普天間基地を眺めて、次に辺野古に移動しました。高速道路を利用して1時間半で辺野古に到着しました。辺野古は日本の天然記念物であるジュゴンの住む海です。その海を埋め立て基地を作ろうとしています。

海岸の鉄条網越しですが、名護市にあるキャンプシュワブの基地もながめました。キャンプ・シュワブ(Camp Schwab)は、沖縄県名護市と国頭郡宜野座村にまたがる在日米軍海兵隊の基地です。その沖合いを埋め立て普天間基地の代替施設を建設案が持ち上がっています。

辺野古では地元のテントで座り込みを続ける反対住民からは「V字形沿岸案の実像は、日本政府が国民・県民向けに行っていた説明とは全く違い、海陸の軍事行動をにらんだ巨大な軍事要塞である」という説明を受けました。

普天間基地包囲行動「人間の鎖」

辺野古からの移動時間は制限されていたので、車中で軽食であわただしく昼食を済ませ、普天間基地までバス移動しました。普天間包囲行動には1万7000人(主催者発表)が参加しました。実行委員会が割り当てを行い沖縄県マスコミ労協とMICからの参加者は宜野湾市の大山地区の包囲行動に参加しました。雨がさらに強まる中で午後2時からの第1回目の包囲の開始を待ちました。雨足は益々強くなりました。



16日の普天間基地包囲行動も雨の中での行動になりました。地元のマスコミ労協からは「沖縄では子供の時から雨の中でも遊ぶことは普通のことで。雨を厭う習慣はありません。雨で行動が流れることもありません」と聞かされたことは印象的でした。(写真：雨中で遊ぶ子ども)



ラジオ沖縄では、普天間基地包囲行動を生放送しており、3分間の包囲開始・終了もラジオ放送からの指示で行っていました。

疑問に思って「実行委員会で番組提供を買取ったのですか？」と質問すると、沖縄県マスコミ労協の方からは「地元の運動を地元マスメディアが放送するのは当たり前。通常の番組です」という回答がありました。沖縄ならではのメディアと住民と結びつきの強さを感じました。(写真：ラジオ放送を流す地元マス協)



参加者はつないだ手を3分間あげて普天間基地の撤去、早期返還を訴えました。午後2時、午後2時半、午後3時の合計3回の包囲行動に参加して、連日の行動を終了しました。(写真：雨の中での普天間基地包囲行動)



憲法メディアフォーラム開設5周年シンポジウム

5月8日(土)午後1時30分より憲法メディアフォーラム開設5周年記念シンポジウム『日米密約とは何だったのか』～現場からの報告～を開催され、80名の方が参加しました。

パネリストに新原昭治氏(国際問題研究者)、春名幹男氏(名古屋大大学院教授)、太田昌克氏(共同通信編集委員)を迎え、コーディネーターは岩崎貞明氏(放送レポート編集長)が務めました。

最初にそれぞれのパネリストが、15分づつの基調報告を行い、質疑応答に答えました。

★新原昭治(国際問題研究者)

有識者委員会報告の「密約論」は日米密約の本格解明をそらす議論であり、安保体制下の日米密約を「古典的帝国主義外交の時代の狭義の密約」を基準に評価すること自体、現実離れしている。米政府は、大戦後の日本に世界戦略上の一大軍事拠点化の道を押しつけた。その歴史の認識を抜きにして、その後安保条約下であいついで交わされた日米密約の実質と特徴を確認することはできない。(写真:左より・岩崎、春名、太田、新原)

核兵器への強い拒絶感や「ヒロシマ・ナガサキをくりかえすな」などの国民の意思を踏みにじる核・軍事政策が、もし公然とおこなわれていたならば、政府自身の存立を脅かす事態に立ち至ったであろう。それを回避することが主目的となって、一連の密約が必要となった。報告は「冷戦の縮図」から密約評価を組み立てているが、日本国民の平和と中立・非核の意思に対する冒涇であり、日米密約の本質に切り込むことが阻まれたと考える。

★太田昌克(共同通信編集委員)

08年9月に村田良平・元外務事務次官が出した回顧録についてネットに「元外務事務次官が密約を認めている」という書き込みがあり、そこから取材して事務次官を中心に密約が引き継ぎがあった事実を初めて知った。しかし、条約局や北米局を経験した主流派にとっては、「密教」の秘密とし

て知っていた。非主流派にとっては「事前協議がないかぎり核持込みはない」という「顕教」の部分しか知らない。村田氏のように非主流派の道筋から事務次官になり、初めて「密教」の秘密を知る。つまり外務省のひとつの権力闘争の縮図であり、「密教」を握る人がどんどん出世していく。

密約がなぜ必要だったか。米の核戦略も日本抜きでは考えられない。しかし、日本では広島・長崎の問題があり、反核感情を惹起すると政策が遂行できない。日本政府も「核の傘」に守られながら反核感情を封じるために日米双方にとって密約が必要だった。しかし、いま「核なき世界」と被爆国日本の立ち位置を考え直す時代に来ている。

★春名幹男(名古屋大学特任教授)

私は有識者委員会の一員でしたが①核搭載艦船の寄港領海通過＝○、②朝鮮半島有事と事前協議＝◎、③有事の沖縄への核再持込み＝×

返還時の原状回復補償費＝○という結論に一応なった。(○＝密約あり、×＝密約なし)

「密約」の存在に外務省の中にも悩んでいる方もいるし、黙殺した人もいるのが現実だろう。東郷和彦氏が文書を整理しメモを残したが、外務省が公開したり

リストを比べるといくつか文書が見つからない。

しかし、1960年代に米大使館のナンバー2だった人から「日本政府は『核を積んでいても見逃す』と言っていた」という証言を聞いた。つまり非核3原則ではなくて、すでに非核2.5原則だった。日本政府はこの非核2.5原則を何度か表に出そうが、それを認めなかったのは国民の力だ。

★岩崎貞明(『放送レポート』編集長)

私に関わった沖縄返還に関する密約の情報公開訴訟の中身は、元毎日新聞記者の西山氏が秘密通信文として入手した関連文書の情報公開請求をしたところ「不開示」それも「不存在」という回答に対する国家賠償を請求訴訟です。4月に判決で不開示決定を司法が否定したが、沖縄の返還の問題というのは、思いやり予算など今日まで続く問題であり、核持込みの問題も文書の有無に関わらず今も続いている問題だ。

